九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

分割ということ：「ソピステス」を中心に

伊東，斌

https://doi.org/10.15017/1397672

出版情報：哲学論文集. 17, pp.35-51, 1981-09-20. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

分割ということ

――『ソピステス』を中心に――

伊東　斌

ギルバート・ライルは、「分割（διαίρεσις）」の方法を、たんに機械的な概念分割の操作にすぎないという観点から、propaedeutic としてディアレクティケーから、そして哲学の途から排除しようとする。[1] ライルのこの意見に対して、アクリルが反論を試みているが、そしてそれは、対ライルということでは充分かもしれないが、アクリル自身もことわっているように、テキストに綿密にあたっているわけではないので、いまひとつ明確さに欠ける憾みがあるように思われる。[2]

プラトン自身について見るならば、我々が知識を求めて真にあるもの（τὸ ὄν）にまで至るのでなければやむことはないという場合、それは『テアイテトス』では「自由人の持つ知識」と言われ、[3]『ソピステス』においては「最大の知識」と呼ばれ、[4] そしてその最大の知識は「類に従って分割すること（τὸ κατὰ γένη διαιρεῖσθαι. 253 D）」と語られてディアレクティケーに属すこととされている。『ポリティコス』においても同様であって、「種類に合わせて分割すること」がディアレクティケーを行う人のなすべきことと語られるのである。[5] したがって、これらの箇処から見られる限りにおいては、「分割」を

propaedeutic として軽んずるわけにはいかないだろうと思われる。我々としては、何よりもまず、「分割」がどのようなものとして語られているかをテキストにあたって見てみることから始めなければならない。但し、本稿で取扱われる「分割」は、『パイドロス』で口火を切られ、『ソピステス』『ポリティコス』で展開されたものに限りたい。まづその典型を明らかにすることから始めたいと思うからである。(6)

I

『ソピステス』『ポリティコス』において幾つかの分割の実例が示されており、それらに見られるところによって、「分割」の方法を明らかにしたいと思うが、そのために具体例を出して話を進めることにする。取り上げられるのは、『ソピステス』劈頭の「魚釣師の技術」の定義である。これは、この対話篇の主題であるソフィストの定義のための「練習（μελετᾶν. 218 D1）」にすぎないとも言えるが、しかし、それのための「範例（παράδειγμα. 221 C 5）」であり、「誰にでもよく知られているもの」でありながら、「しかもそれを定義するには、もっと重大なもののどれにも劣らぬだけの言論を要するもの」(7)として、模範的な定義の一つと言えるものなのである。

魚釣師の技術の定義は何を目指しているか。極めて当然のことながら、それは定義を目指している。しかも、魚釣師の定義を、である。しかし、魚釣師そのものの定義として求められるのではない。つまり、人間としての魚釣師が定義されるのではなく、魚釣師が有している技術、その技術を有しているが故にその人がその技術の名で呼ばれるところのその技術が定義されるというかたちで求められる。そして、その定義を求めるための方法が「分割」の方法である。それはどのように行われるのだろうか。

〈技術〉はまづ作る技術と獲得の技術に分割される。もう少し詳しく見ると、すべての技術は「二つの種類（εἴδη δύο.

219 A 8）」に分かれるから、その各々を、一方を作る技術と呼べば正当な名前で呼ぶことになり、もう一方を獲得の技術と呼べば最も適切だということになる。[8] つまり、分割はただたんに分割ないしは切断していればそれでよいというものではない。分割された一つ一つのものを、それぞれ正当なあるいは適切な名前で呼ぶ[9]ということが重要なモメントになっている。〈技術〉は二つに分割された。問題の〈魚釣師の技術〉は明らかに後者に属す。そこで、後者の〈獲得の技術〉が取り上げられて二番目の分割が行われる。すなわち、交換によって獲得する技術と、力ずくで手に入れる捕獲の技術とに分けられ、それぞれの名で呼ばれる。〈魚釣師の技術〉は後者に属す。そこで更にこの〈捕獲の技術〉が分割を受けて、公然と闘い取ることの技術と、目ざす相手に気づかれずに狩猟する技術とに分けられる。〈魚釣師の技術〉は後者に属す。そこで更に、……。[10]

このようにして、それの定義が求められているそのもの（今の例では〈魚釣師の技術〉）が属す技術の部門が次々と分割されて、その分割によって明らかにされる技術の部門の内容が最初に立てられた目的（〈魚釣師の技術〉）に合致するまで続けられる。ここまで来ないうちは、つまり「先ほど私たちが見出すべき課題として立てた、まさにそのことがいま、なしとげられた[11]」ということが明らかにならないうちは、分割の歩みは停止することがない。そしてそこにまで至れば、求めていた定義は完成する。「してみると、いまや君と私とは、〈魚釣師の技術〉ということについて、ただその名前についてだけ合意しているのではなく、その事柄自体を規定する言論（定義）（λόγος）をも充分に捉えたことになる。」[12] しかし、これですべてが終ったわけではない。もう一つ作業が残っている。定義を自らのものとするためには「総括」を行なわねばならない。すなわち、分割の各段階において、定義さるべきものが属すとされた技術を枚挙してそれらを一つづきのものにまとめることである。〈魚釣師の技術〉とは、〈技術〉のうちの〈獲得の技術〉のうちの〈捕獲の技術〉のうちの……〈釣漁〉のうちの〈下から上へ引き上げる〉やり方のものである、というように。ここに至ってはじめて、分割の方法による定義が達成されることになるのである。

以上、〈魚釣師の技術〉が分割の方法によって定義されるありさまを概観してきたが、そこにおいて次の三つのものが不可欠の構成要素をなしているように思われる。(A) 分割、(B) 命名、(C) 総括、である。[13] そこで、以下、両対話篇における分割の実例におけるあり方をも併せて、この三要素について、もう少し詳しく見ていくことにしたい。

(A) 分割。当然問わるべきは、何を分割するのか、ということであり、次いで、何へと分割するのか、が問題とされるであろう。実例に現われたかたちで答えれば、分割されるのはすべて〈技術〉である。『ソピステス』における〈魚釣師の技術〉、〈ソフィストの技術〉、『ポリティコス』における〈政治家の持つべき知識（ないし技術）〉、〈機織り術〉の如く。[14] そしてその〈技術〉が次々に分けられていくわけであるが、その分けられた各段階ごとに存在するのも〈技術〉であり、最終的に定義として求められるのも〈技術〉である。ところで、その「分けられるもの」であるが、――最終段階で分けられて出て来たものを除いて、途中の段階での「分けられたもの」はまた「分けられるもの」となる――それは何と呼ばれているだろうか。何か特別の名前を持っているかというとそうではなく、一番最初の出発点で語られるのは、それぞれの場合に問題となっているものの全体である。〈魚釣師の技術〉の場合、「およそすべての技術は（*τῶν τέχνων πασῶν*, 219 A 8）、二つの種類に分かれるといってよい」として分割が始められ、〈政治家の技術〉の場合も、「我々の知識の全体（*πάσας τὰς ἐπιστήμας*, 258 C 6－7）」を分割することから出発する。これらから、分割さるべきは複数のものと考えねばならぬかというと、そうはならない。分割されたものが、更なる分割を受ける時は、つまり新たに分割さるべきものとして登場してくる場合は、必ずしも複数ではないからである。〈魚釣師の技術〉において、技術の全体（複数！）が〈獲得の技術〉と〈作る技術〉に分けられたのち、一方の〈獲得の技術〉が「分けられるもの」として登場する場合は単数である。「その〈獲得の技術〉には二つの種類のものがあるのではないか？（*κτητικῆς δὲ οὐ δύο εἴδη*; 219 D 4）」と語られるからである。そして、それに続く分割のプロセスにおいても、各段階ごとの「分けられるもの」は単数で語られている。しかし、これも単

数ということで一定しているのではなく、〈ソフィストの技術〉の分割の途中では「分離の仕事はすべて（πᾶσα ἡ τοιαύτη. 226 D 9）」浄化と呼ばれている、と複数を意味する言葉で語られている。要するに、分割されるものとして、単一のものが考えられているか、それとも、集合体が考えられているか、ということについては、定められないということである。また、分けられるものとしての特定の名前も持っていない。それに反して、分割がそれへと行なわれるそれは、一定の名前を持っている。「種類」（γένος, εἶδος）と「部門」（μέρος）がそれである。頻度から言えば、前二者、とりわけエイドスが一番である。ただし、エイドスとゲノスとの間には身分の差異はない。[15] それに比べると「部門」（メロス）は少し異なる。ゲノス或いはエイドスであればメロスであるが、メロスであるからといって、必ずしもゲノス乃至エイドスであるわけではないからである。[16] したがって、分割は種類へという方向をとる。そしてその種類へと分けられると、その各々のものはそれぞれの名前（例えば〈捕獲の技術〉、〈狩猟術〉）で呼ばれる。そして、それが次の分割を受ける時はまた、種類へと分けられる。したがって、最初に分けられるものを除けば、それ以降はすべて、種類から種類への分割の系列として現われてくる。最終段階においても同様である。「それに対する残りのものとしては、あと一つの種類（εἶδος）だけだ。[17] そしてそれが求められていた〈魚釣師の技術〉なのである。

分割されるものは、テクニカルタームは有しないものの、[18] それとして考えてみれば、それが一なのかそれとも多なのか、ということが次の疑問として生じて来る。先に見たところでは、一番最初の分割されるものは複数で語られ、それ以降の分割のプロセスにおいては、大多数が一なるものとして取扱われていた。バラツキがあり、統一して考えられていないと言われるかもしれない。しかし、複数で言われているものにしても、〈技術〉は「技術を身につけた者」を「技術を持たぬ者」から区別するものとして何か一まとまりのものであるし、それ故に「技術」という一つの名で呼ばれているのである、『ポリティコス』における〈知識〉も同様であって、「知識の全体は一まとまりのもの」[19] と明言されているのである。また逆に、単数で語られている「分けられるもの」にしても、例えば〈作る技術〉は一つの名前で呼ばれているが、それには「農業」、

「生きものを育てる仕事」等々の技術が含まれていて、それらを一つにまとめてその技術の名を有しているのである。[20] その他の場合も同様である。したがって、多としてあらわれているものも、一であることの明確な意識のもとに、そのように語られているのであり、逆の場合も、多であることを含んだうえでの一として描かれているのである。一にして多なのである。[21]

次の問題は、どのように分割するのかということである。分割は任意に行なえるのか、ただ分割すればそれでよいのだろうか。既に見たように、分割は「種類に従って」なされねばならない。その「種類」とは何を指すのか。そのために先に見られたゲノス・エイドスとメロスとの区別（『ポリティコス』二六三A——B）の持つ意味を考えてみよう。その区別が語られるのは、数を奇数と偶数とに分けることと、一万と残り全部とに分けることとの比較対照、または、人間を男と女とに分割することと、ギリシア人と夷狄とに分割することとの比較対照においてである。[22] 両方の比較対照において、それぞれ前者が、メロスとゲノス・エイドスが一致するもの、後者は一致しないものの例である。このことが意味するところは、分割がそれに従うべき「種類」は決して我々の側にではなく、対象の側に存在するということである。それ故に、分ける時には「ものの真の種類を無視してはならない」、つまり「切って得られる部分が同時にものの真の種類をなしてくるようにすべき（*τὸ μέρος ἅμα εἴδος ἐχέτω*. Politicus. 262 B 1—2）」なのであり、犠牲獣を「関節に合せて（*κατὰ μέλη*. Politicus. 287 C 3）」解体するように分割しなければならず、「自然本来の分節に従って切りわけながら、様々の種類に分割する（*κατ' εἴδη διατέμνειν κατ' ἄρθρα ἃ πέφυκεν*. Phdr. 265 E 1—2）」のでなければならない。また、種類を分かつ区別原理が我々にではなく、対象の側にあることについては、「何らかの割れ目をそれ自身の内に持つ」（Soph. 267 E8）とか、「真の種類の中に（*ἐν εἴδεσι*）含まれていて、これを構成している真の差異（*τὰς διαφοράς*, Politicus. 285 B 2）」という表現によって示されている。対象の中にある割れ目や差異に沿って分けていかなければならないのであり、もしそのようになしうれば、我々は正しく（*ὀρθῶς*）分割することになろう。分割の正しさの基準は種類、というよりも、それを弁別構成する割れ目乃至差異にあるということになろう。したがって、正しく分割を行なうためには、その割れ目乃至差異の発見につとめね

ばならない。正しく分けないと正しく命名できない。

（B）命名[23]。分割が行われるたびごとに、分割されて出て来たものに名前を与えることは、執拗と思えるほどに強調される。一見、分けることよりも命名することのほうに情熱を傾けている感じさえ与える。分割のどの段階であれ、分割されるものは種類に従って分割されるが、その分割されたものは、今度はそれぞれの名前（ὄνομα）で呼ばれる。ではその命名はどのようにして、また何に基いて行われるのであろうか。まず範例としての〈魚釣師の技術〉の分割に伴なう命名の実際から見ていくことにしよう。〈技術〉が二つの種類に分割されて、一方は〈作る技術〉、もう一方は〈獲得の技術〉とされるのであるが、この短い箇処（二一九A八――C八）の中に、命名の秘密が全て潜んでいると言ってもよいほどだからである。

〈技術〉が分割されて二つのものが出て来た時にまづ為されるのは、それを「どんなふうにして、何という名前で呼ぶか」ということの検討である。勝手な命名は許されない。「正当に（δικαιότατα. B1）」そして「適切に（διαπρέπειν. C7）」呼ばねばならない。そのために、それぞれの種類に含まれるものを吟味する必要がある。〈作る技術〉の中には、何度も触れられた如く、農業、生きものの世話その他が含まれている。そして、これらの一つ一つもまた技術である。つまり、幾つかの技術が、一つの技術の名で呼ばれているということである。それは、農業以下の技術の中に或る一つの共通なものがあり、それがそれらを一つの名で呼ばせているということである。ただし、ここで注意しておかねばならないのは、〈技術〉を二つに分けてみたら、その一方に、偶々、農業その他の技術が含まれていたということではないということである。むしろ逆に、農業その他の技術を一つの種類として、それに一つの名前を与えるのである。そして、その一つの名前を与えるものとになるのが共通のものである。これはどの段階においてもそうであって、少し後の〈分離の技術〉においても、「われわれはそれらすべての中に共通して、そうした仕事に関わる一つの技術が含まれているものとみなして、その技術を一つの名前で呼んでしかるべきだろう。[24]」と語られるのである。したがって、この共通のものこそが命名の始源ということになろう。

農業その他の技術の場合は、「どれもみな、この作るということへ向けて、自己自身の力（τὴν αὑτῶν δύναμιν. 219 B 9）をはたらかせる」という共通性の故に〈作る技術〉と呼ばれるのである。この共通のもの（モラヴシクに従って「デュナミス」と呼べば）[25] すなわちデュナミスが名前を与えるということは、農業その他の技術の一つ一つがそれに与る共通のデュナミスにおいて命名されているということであり、このデュナミスが異なれば、名前が異なると同時に、種類も異なるということになり、（A）で語られた「割れ目」乃至「差異」へと連なっていくことにもなろう。

デュナミス故にその名を持つ。分けられるからではない。また、分けられたのちに名を持つのではない。名を持っているから分けられるのでもない。いわば、名を持つものへと分けられるのである。教育の部門について、「名前を与えるだけの重要性をもった特定の部門へと、さらに分割されうるものなのか」どうかが問題にされる箇処がある。[26] ここでは、命名に値するかどうかということと分割可能性とが、いわば等価に取扱われている。命名と分割とが従属関係においてでなく把えられているということである。そしてその両者を結びつけるものがデュナミスであろう。だから、デュナミスに適合した名前が正しくて適切な名前ということになる。農業その他の技術はすべて「作る」というデュナミスにおいて共通しているから〈作る技術〉と呼ばれれば正しい名で呼ばれることになるのである。逆に、デュナミスに合わない名前を語れば、例えば「縦糸や横糸を作製する技術に機織り術という名をつければ」その人はとんでもない「偽りの名称（ψευδὸς ὄνομα）」を口にしていることになるのである。[27]

命名とは、すなわち正しい命名とは、その名が、それのもとに属す諸技術が共通に有するところのものを指し示すことにおいて成立する。そして、その共通のものによって分割可能性が拓かれるとすれば、分割とは命名なりと言えなくもないであろうか。[28]

（C）総括。分割・命名のプロセスが進行し、最初に目的としたものに到着すると、そこでその進行は止み、総括が行わ

れる。「次のように言うことによって総括することにしよう（*συναγάγωμεν*. Soph. 224 C10）。」そしてその総括は、分割の進行において到達された名前のつなぎ合せにおいて成立する。「名前をつなぎ合せて行ったうえで、一つに結びつけてまとめるべきではないか（*συνδήσομεν τοίνυμα συμπλέξαντες*. Soph. 268 C 5－6）。」かくて、得られた定義（ロゴス）は、求められていた技術が属すところの諸技術の名前の枚挙ないしは網羅である。すなわち、その当の技術が、そしてその技術のみが属す技術の枚挙である。それは、分割の各段ごとに、その技術が属す技術のみを選んで来たからである。分割されたものの中から、当の技術が属すものを選ぶということは、同時にまた、属さないものを排除するということであるから、分割のプロセスは選びのプロセスであるとともに、排除のプロセスでもある。そして、当の技術に到着したということは、もはや排除するものがなくなったということ、言いかえれば、それまでは、当の技術とともにそれ以外のものをも含んでいたが、選びかつ排除の作業を続けた結果、もはや当の技術以外は何も残っていないこと、デュナミスの限定がそこまで来たこと、が確認できたということであろう。そこまで行ったらはじめて、ふり返って今までの分割結果を総括することができるのである。そして我々はここでようやく定義をうることになる。

だが、これを定義ととらない人がいる。モラヴシクがそうだが、彼はロゴスを定義（definition）ととらずに、「特性記述」（characterization）とする。その意味は次のとおりである。プラトンは今日の辞書的タイプの定義を目ざしていたのではないとして、特性記述というかたちで考えていこうとするわけだが、その特性記述とは、例えば数の「二」を考えた場合、「それは最も小さい偶数である」「一の次に来る数である」「四の二分の一である」等々の如く、そのものの特性を示す言論である。これらは全て間違いではない。そしてそれぞれが、「二」という数の何であるかを説明する一つの方法である。ただし、これらの特性記述にはいわば優劣の差はあるかもしれない。或る特性記述は別のそれよりも、より一層はっきりと示しているということはありうる。だが、優劣の差は正しさを害しはしない。〈ソフィストの技術〉や〈政治家の技術〉においても事情は同じであって、両者とも一つのロゴスではなく、幾つかのロゴスを有している。しかし、ロゴスの複数性は、それら

が実在に触れているということに反対する議論にはならない。およそこれが彼の考えているところである。[29] だが果してこれでよいのだろうか。分割の方法は特性記述を求めるためなのだろうか。

II

古来、「人間は笑う動物である」とか、「人間は労働する動物である」などの規定が人間についてなされてきた。これらは人間の何たるかを示しているし、人間のみにあてはまることを現わしている。その意味ではこれらは人間の特性記述であるといってよい。しかしこれらの規定が働く主な舞台はどこであろうか、と考えてみた場合、出て来る答は、人間を人間以外の他の動物から区別するための特徴ということにあって、人間の本質、すなわち、特に人間を人間たらしめているもの、それを欠けば決定的に人間が人間でなくなるもの、を現わす役割は与えられていない。後者のためには、たとえば「人間は理性的動物である」といった定義が用意されていた。この、本質を現わす定義も、人間の特性を示す規定の中に入れることができようが、逆に、前記の特性記述は本質を現わす定義に数え入れることは出来ないと言わねばならない。他との区別を示す特性記述と本質を現わす定義とは区別しなければならない。[30] 我々は、分割をとおしてかくの如き特性記述しか期待できないのであろうか。

『ソピステス』において、分割が始められたのは、名前だけ同じでも、各人の了解が別かもしれないので、ロゴスによって、その名の意味を明らかにしようという目的からであった。[31] それなのに多くの特性記述が得られたということで済ませてよいのだろうか。『パイドロス』において、我々が議論を行なう場合に注意して守らなければならないこととして次のことが言われている。[32]「議論にとりあげている当の事柄の本質が何であるかを、知っておかなければならない。」それがないと、先へ進んでから当然のむくいを受け「自分自身とも、またお互いに相手の者とも、言うことが一致しない」という状態に陥

ると。我々の前に今、ソフィストに関して六つの規定が出て来たということはまさにその「当然のむくい」を受けている状態なのではないだろうか。だから、最初に六つのソフィストの特性記述がなされた後、それを再検討して、我々は未だ〈ソフィストの技術〉の中核（「そうしたさまざまの知識のすべてがそこへと収斂されるところの、その技術のもつ肝心のもの」）[33]を掴んでいないということが指摘されたのではないだろうか。モラヴシクはこの文章を、優劣の指摘ではあっても真かどうかの指摘ではないと解するが[34]、分割を行なった目的からすれば、それでは不充分だということをこの文章は言おうとしているのではないのか。分割を行なっていれば特性記述が様々に出て来るかもしれない。だがそれで終ることなく、それらの特性記述がそこへと収斂されるところのその肝心のものをこそ把握すべきだと言っているのではなかろうか。だからこそ、根本から考え直して第七の規定にたどりついた時に「完全に正真正銘のソフィスト（τὸν παντάπασιν ὄντως σοφιστήν. 268 C3－4）」を把えたと言い、「最も真実のこと（τἀληθέστατα. 268 D4）」を語ることができると言いうるのではないだろうか。そしてそこに、特性ではない本質規定を見てもよいのではないだろうか。

ところで、特性記述はどこから登場して来たのか。範例としての〈魚釣師の技術〉の分割の手続をかたどおり踏んでいったはずなのに六つもの特性記述が出てきたのはどういうわけだろうか。〈魚釣師の技術〉の分割においては、ただ一つの定義が得られただけで、多くの特性記述は出て来なかった。〈魚釣師の技術〉に幾つかの特性がないとは考えられない。それなのに〈ソフィストの技術〉の分割と異なるのは何故であろうか。第1節で見られたことをもう一度想い起してみよう。

分割は、文字どおり分割すればそれでよかったか。そうではなかった。恣意は許されなかった。「切断によってできた部分」と「真なる種類」は必ずしも同じではなかった。[35]その違いはどこにあったか。〈魚釣師の技術〉の分割の第一番目は、〈技術〉を〈作る技術〉と〈獲得の技術〉とに分けることだったが、その時まづ為されたのはどういうことだったか。共通のもの、すなわちデュナミスに従って農業その他の技術を「一つにまとめて（συγκεφαλαιωσάμενοι. Soph. 219 B11）」〈作る技術〉と呼ぶことだった。これは『ソピステス』『ポリティコス』では一度も語られないけれども、「総合（συνόψις.

συναγωγή）」である。一般には、二つの種類に分ける前の段階、今の例で言えば、技術を全部集める段階にのみ総合は語られるが、[36] しかし、その後の分割の各段階にも含まれていると言わねばならない。[37] 総合とは、『パイドロス』の規定では「多様にちらばっているものを総観して、これをただ一つの本質的な相へとまとめること」[38] であって、まさに、農業その他の多様にちらばっているものを総観して、それをただ一つの本質的な相すなわち〈作る技術〉へとまとめることであり、総合以外の何ものでもない。もう一方の〈獲得の技術〉に関してもまったく同様である。ということは、分割は（切断された部分にではなく）種類に分けられるのだが、その種類を形成するのは総合の仕事ではないかということである。先に見られた言葉で言えば、デュナミスに従って種類が形成されるが、そのデュナミスの発見が総合の仕事であろうということである。一つのデュナミスに従って一つの種類が形成される。そこに別のデュナミスを見出せば別の種類を形成する。[39] すると、これも先に言われた「割れ目」の発見も総合の仕事となろう。すなわち「自然本来の分節」の発見が総合の仕事ということである。だが、この「自然本来の分節」は既に見られたように『パイドロス』における分割の規定に含まれているものである。それが今は総合の為すべきこととされた。ということは、分割は総合に基づいてなされるということである。しかも、各段階ごとにそうである。ここまでくれば、〈魚釣師の技術〉の分割と〈ソフィストの技術〉の分割との間の差異の原因は明らかであろう。後者における総合の不足が原因である。「複雑多彩（*ποικίλη*, Soph. 223 C 2）」で「一筋縄ではいかぬ複雑な相手（*τὸ ποικίλον*, Soph. 226 A 6）」ゆえ、なまなかな総合ではうまく分割できないのである。

総合がきちんと行われれば、区別・排除の真の意味がわかってこよう。区別・排除とは、属さない種類をただたんに「ノンA」として捨て去ることではない。もしそうすれば、ギリシア人と非ギリシア人（すなわちバルバロイ）となり、無理な命名を行なうことにもなるのである。真の区別・排除はそうではなく、「ノンAであるB」として区別するのであり、その場合、Aも「ノンBであるA」というように、区別・排除されたものを、いわば影の如く伴なっているものとしてとらえられるのでなければならない。[40]

分割は総合に基づいて行われる。「種類に従って」分割されるその種類が総合によって発見されるのだから、各段階毎に分割は総合に従ってなされる。このことは次の三点によって裏づけされるだろう。はじめの二点は『ポリティコス』の箇処、三点目は後期対話篇全体によって。(i) まづ初めは、何度かふれられた「真の種類」と「切断によってできる部分」の相違の指摘(二六三AB)。これは、総合がなければ分割は恣意的になることの指摘である。(ii) 次は二八五Bにおける「種類に合せて分割していく」ことの説明。親近関係にあるものどもの場合、真の種類の中の真の差異のありようを見きわめること。類似していないものどもの場合、近い関係にあるもの全部が一まとまりの種類をかたちづくっているのを洞察しながら取りまとめてしまうこと。と分割・総合の両者に分けて説明してあること。(iii) 最後は、『パイドロス』以降、ディアレクティケーはすべて「分割」という言葉だけで説明されて「総合」という言葉は出て来ないが、言われている内容は『パイドロス』で総合と分割に分けて言われていることそのままのかたちである。したがって、言葉としては分割だけだが、その中に総合が含まれていると解してよいのではないかということ。以上の三点である。

分割は種類に従って行われる。その分割は種類の発見とともに、差異の発見であり把握である。そして、差異の把握はロゴスの把握である。[41] 我々は真の意味で知ることを願う。そのためには、いわば雑多な特性記述で満足するわけにはいかない。[42] 本質を示す定義を求める所以であり、また、そこにこそ、最後の問「何故分割するのか」がかかっているのである。そして、「『分割』の手続きが有効にすすめられるためには、雑多なものの中に共通の本質的性格を観てとるという、はじめの『綜観』(シュノプシス、シュナゴーゲー)の方法が、分割法の実際にあたってつねに補われ、裏づけられていなければならないのである。[43]」と言わねばならない。

註

(1) G. Ryle, *Plato's Progress.* 第四章後半。

(2) J. L. Ackrill, 'In Defense of Platonic Division', in *Ryle* (ed. by O. Wood and G. Pitcher) pp. 373～392.

(3) 172 D sqq. 尚、プラトンの邦訳については、断りのない限り「プラトン全集」(田中美知太郎・藤澤令夫編、岩波書店) 所収のものに従う。

(4) 252 C.

(5) 285 A－287 A.

(6) 『ピレボス』における分割については、また独立に論じなければならないと考えている。

尚、『パイドロス』以前の対話篇においても「分割」が見られるという説がある。例えば『ゴルギアス』四五四E及び四六四―四六六において分割の方法が語られているという (P. Shorey, *The Unity of Plato's Thought*, p. 31. note 200, p. 51. note 371. E. R. Dodds, *Plato's Gorgias*, p. 226.)。たしかに分割ということはある。だが、そこでの分割は、その対象としてイデア次元のことが考えられていたかどうかは疑問である。また、方法の意識もあったであろうか。あるいは『国家』にも見られるという (R. Robinson, *Plato's Earlier Dialectic*, pp. 143–5.)。ロビンソンは、線分の比喩においては総合と分割は考えられていなかったが、『国家』全体からするとかすかにではあるが考えられていたという。だが、太陽の比喩で、善のイデアが認識と存在の源と語られるけれども (五〇九B)、だからといって、善のイデアに分節が認められているとはいいがたい。筆者としては、基本的には、総合と分割は後期のものと考える。我々のなすべきはまづ分割の実態を確かめることであって、その先駆がどこでどのように現われているかは、その次に取扱われるべきことではなかろうか。

(7) Soph. 218E.

(8) Soph. 219B–C.

(9) 正当な名前で呼ぶと言われたのは「これらすべては、きわめて正当にこれを一つの名前で呼ぶことができるだろう。(*σύμπαντα ταῦτα δικαιότατ' ἂν ἑνὶ προσαγορεύοιτ' ἂν ὀνόματι*. 219 B 1 － 2)」からであり、適切な名前で呼ぶというのは「これらすべての部門をつらぬいて〈獲得の技術〉といった呼び方がなされるならば、最も適切であると言えるだろう。(*μάλιστ' ἂν που διὰ ταῦτα συνάπαντα τὰ μέρη τέχνη τις κτητική λεχθεῖσα ἂν διαπρέψειεν*. 219 C 6 － 7.)」による。

(10) 全体については、前掲の「プラトン全集」第三巻一七二頁の分割一覧表参照のこと。

(11) Soph. 221A5—6.

(12) Soph. 221A7—B2. 尚、『ソピステス』にあっては、λόγος が定義を意味し（用例としては二一八C、二一八E、二四五E）、ὁρισμός（ὁρίζειν）は他と区別するための mark にすぎないということをセイヤーは指摘している。K. M. Sayre, *Plato's Analytic Method.* p. 165. note 24.

(13) モラヴシクの言い方では、(a) a series of namings, (b) a series of cuttings, (c) the interweaving of the products into definitions. J. M. E. Moravcsik, 'Plato's Method of Division'. in *Patterns in Plato's Thought.* (Ed. by J. M. E. Moravcsik.) p. 160.

(14) 但し、細かく言えば、『ポリティコス』における分割は、必ずしも〈技術〉を分けているとは言えない場合もある（三〇二C—三〇三Bの政体の切断、三〇六A—三〇七Cの性質の区分）が、それらは〈政治学の技術〉とのからみで語られているので、特に独立させて取扱うことはしない。

(15) ゲノスがエイドスと言いかえられ、逆に、エイドスがゲノスと言いかえられているからである。Soph. 222 D3—6, 227 D13, 228 E1. それより何より、ディアレクティケーの仕事としての「〈類〉に従って（κατὰ γένη）分割すること」（Soph. 253 D）が、「〈形相〉（種）に従って（κατ' εἴδη）分割すること」（Soph. 267 D5—6）と言いかえられるのだから。

(16) Politicus. 263 A—B. したがって、『ソピステス』二二三C六—七のメロスの使用は、ゲノス乃至エイドスと合致した場合のことである。因みに、ティラーはこの箇処のメロスを part と訳すが（A. E. Taylor, *Plato, The Sophist and The Statesman.* p. 263.）、スケムプは a mere portion (263A), a portion (263B) として subdivision（ゲノス、エイドスともこの訳）に対立させている。（J. B. Skemp, *Plato. The Statesman.* pp. 132—3.）

(17) Soph. 220 E6.

(18) 後の形式論理学における類種関係を示す使用法を窺わせるものとして、「もろもろの〈類〉を〈形相〉（種）に従って分割すること（τῆς τῶν γενῶν κατ' εἴδη διαιρέσεως. Soph. 267 D 5—6.）」という一文があるが、これも数行あとで「後者の種族は一種類か二種類か（τὸ γένος ἓν ἢ δύο. Soph. 268 A 9）」とあるから、分類されるものをゲノスという名で呼ぼうというはっきりした意図はなかったと思われる。

(19) 258 E6.

(20) Soph. 219 A–B.

(21) 「一と多」の問題はここでは取扱われない。この問題は『パイドン』『パルメニデス』あるいは『ピレボス』などで、様々の局面において論ぜられているが、『ソピステス』においては、「メギスタ・ゲネー」の議論の検討を経た後でないと正式には問題にできないであろう。

(22) Politicus. 262 D–E.

(23) この命名の重要性に着目したのはモラヴシクの功績であろう。だが、そのことを充分生かしていないように思える。前掲論文参照。

(24) Soph. 226 C5–6.

(25) op. cit., p. 161.

(26) Soph. 229 D6.

(27) Politicus. 281 A12–B1.

(28) 但し、分けられたもののすべてが名前を持つわけではない。例外的に名前を与えられないことがある。『ソピステス』二二五C二—三で分割された一方のものは、一まとまりの種類をなすものとされながらも、「名前を与えられるほどのものでもない」と言われる。モラヴシク（前掲論文一六一頁）によれば、探究の目的がこの種類に属さない故ということになるが、しかし、この理由を強く主張すれば、分割されたものの半分（二分割として）は無名のままでいいということになりはしないだろうか。他の場合はすべて命名されているから、ここでの無名の理由は、そのもの自身の故であって、テキストにあるように、「あまりにも細かく種種雑多なものに分かれている」（二二五C五—六）からであろう。

(29) op. cit., pp. 165–6.

(30) 「哲学」（井上忠編、弘文堂）第一章、三—1、（宇都宮芳明著）参照。この書物は入門用である。それ故にまた、簡明で正確な記述が要求されるであろう。

(31) 218 C.

(32) Phdr. 237 C. 「本質」は *οὐσία* の訳語。

(33) Soph. 232 A.

(34) ibid.

(35) Politicus 263 A—B.

(36) e. g., F. M. Cornford. *Plato's Theory of Knowledge*. pp. 170. 186.

(37) ハックフォースは多くの段階で総合が見られるというが、筆者のように、各段階に必然的に存在するとは考えていないようである。R. Hackforth, *Plato's Examination of Pleasure*. pp. 142—3. Additional note.

(38) Phdr. 265 D.

(39) だから、そのデュナミスの数に応じて、分割は必ずしも二分割ではない。『ピレボス』十六D、『パイドロス』二三八A—C、二四四—五、二七〇C—D、『ポリティコス』二八七C参照のこと。

(40) メギスタ・ゲネーの「同」「異」は指呼の間にある。

(41) Theaet. 208 D.

(42) 我々は本質を示す定義を特性記述とは区別する。と同時に「識別」(幼児が、何故とは言えずに、人間を犬や猿とは区別して人間として把えていること、また我々が定義を与ええないでも赤を赤として把握していることなど) とも区別したい。一つの理由は、識別はロゴン・ディドナイが出来ないということ。識別されたものを分割法によって定義へともたらすのではないのか、という問いかけに対しては、『テアイテトス』第三部の完全な解明がなされた後でなければ答えることができないと返事しておこう。

(43) 藤澤令夫(田中美知太郎共著)「プラトン著作集　パイドロス」一〇五頁。

では、その総合はどのようになされるのかということが次の問題になろうが、今それに触れる余裕はない。コーンフォード(前掲書一八六頁)にならって intuition と言うよりも、藤澤先生に従って「想起」(同)と言いたいところである。

(山口大学教育学部助教授・昭和四十一年本学大学院博士課程修了・哲学)